紀要『人文・自然研究』第 16 号

中国語離合詞の教え方に関する一試論

劉　時珍

2022 年 3 月 25 日発行
一橋大学 全学共通教育センター

人文・自然研究　第 16 号

Hitotsubashi Review of Arts and Sciences 16

2022 年 3 月 25 日発行

発行：一橋大学全学共通教育センター

186-8601 東京都国立市中 2-1

組版：精興社

中国語離合詞の教え方に関する一試論

劉　時珍

1. はじめに

間接法で行われる外国語教育[1]において，母語と目標言語の対応関係を踏まえ，学習者が持つ母語の知識を活かした教育の重要性が説かれることがある[2]．本稿もこうした流れに沿い，中国語の「離合詞」について，日本語母語話者が持つ漢語の知識を活かした効果的な教育方法を考えるための基礎的考察を行う．

本稿では，日本語を母語とする中国語学習者の離合詞への理解を深め，使いこなせるようになるという目的を持ち，中国語の離合詞の特徴を押さえて，日本語の母語の正の転移を活かした離合詞の教え方を探る第一歩として，離合詞の判定に関し日本語母語話者が持つ日本語に関する知識を利用する効果を検討する．

2.「離合詞」をめぐって

本稿では「離合詞（離合動詞）」を考察対象とする[3]．本節では，離合詞の定義を行い，離合詞に関する先行研究をまとめる．

2.1 「離合詞」の定義

中国語には「離合詞」と呼ばれる語群がある．例えば，「唱歌」は（3）のように他の語の目的語となる場合などは一語として振る舞うが，それ自体がアスペクト助詞や時間や頻度などを表す（数）量詞をとる場合は，（1a）からわかるように，それらの要素が前成分「唱」と後成分「歌」の間に置かれる（したがって，（1b）は非文法的になる）．これは，中国語と基本語順（SVO）が同じ英語とも異なる（（2a）（2b）参照）．

（1）　a．我　唱　　了　半小时　歌.
　　私　歌う　た　半時間　歌
　　私は半時間歌を歌った.
　　b．*我唱歌了半小时[4].

（2）　a．I sang some songs for half an hour.
　　b．?? I sang for half an hour some songs[5].

（3）　我　喜欢　　唱歌.
　　私　好きだ　歌う
　　私は歌を歌うのが好きだ.

本稿では，守屋（2013）などを参考に，離合詞を次のように定義し，以下の議論の便宜上，（4c）の統語現象を「離合現象」と呼ぶことにする[6]．

（4）　a．（通常）二字からなる　Ex.「见面」「读书」「散步」など
　　b．（通常）VN（V：動詞，N：名詞）の語構成を持つ

c．（数）量詞（ここでは時間や頻度などを表す副詞句に相当）やアスペクト助詞がＶとＮの間に置かれる[7]

ここで注意すべきことは，離合現象自体は述語であるＶが他動詞で（直接）目的語Ｎをとる場合にＶとＮの間で一般的に見られる現象であることである．例えば，「唱歌」は離合詞なので，(5) からわかるように，アスペクト助詞「了」は「唱（V)」と「歌(N)」の間に置かれるが，これは，(6) のように「唱」が一般の目的語をとるときと同様の現象である．なお，アスペクト助詞の場合は（　）内の離合なしの表現も可能である．

(5)　我　昨天　唱　　了　歌．（OK 我昨天唱歌了[8]．）
　　私　昨日　歌う　た　歌
　　私は昨日歌を歌った．

(6)　我　昨天　唱　　了　日本　歌．（OK 我昨天唱日本歌了．）
　　私　昨日　歌う　た　日本　歌
　　私は昨日日本の歌を歌った．

2.2　先行研究

離合詞は中国語学では陳（1940）によって初めて指摘された．初めて「離合動詞」という言い方を用いたのは張（1957）『略論漢語構詞法』である．一方，離合という現象から，離合詞を単語ではなく連語を見なす研究者もおり（呂 1974)，「離合詞」が単語か連語かが長い間論じられてきた．

中国語教育において，離合詞は日本人学習者にとって習得しにくい項目とされている（韓 1999，宮本 2000)．そうした中，張ほか（2021）は離合詞レキシコンを開発し，これにより離合詞のリスト，具体的な使い方が簡単に調べられるようになっている．

離合詞の教授法に関する論文には鄧（2012）と冯（2009）がある．

鄧（2012）では，離合詞には共通のルールがあるが，特殊例も多数存在すると指摘されている．初級段階で「離合詞」の基礎を教えたあと，中・上級の段階ではその豊富な拡張形式を取り込みながら組織的に詳しく解説することが重要であること，「単語表」の離合詞を記号でマークすべきであること，教材面で「離合詞」関連の内容を充実していく必要があることなどが指摘されている．

冯（2009）では，離合詞は中国語の言語発展史の産物であり，古典語の単音節語中心から現代語の両音節語中心に変化してきた結果であることが述べられ，次に，教える際には，VN 型の離合詞の特徴，「離」の場合に挿入され得る成分を説明し，個々の離合詞の特徴を１語ずつ説明していくことが効果的であるものの，特殊例もあり，細かい分類から帰納しにくいことも指摘されている．

なお，中国語教科書，文法解説書における離合詞の扱われ方については，5.1 節で取り上げる．

以上離合詞に関する先行研究を概観したが，離合詞自体の説明においても，その教授法においても，文法的観点や誤用分析的観点からのものが主で，日本人学習者にとって，離合詞のどこが簡単でどこが難しいのかを示し，日本語を母語とする学習者の母語を生かすという点から論じたものは管見の限り存在しない．

そこで，筆者は，日本語を母語とする学習者の目に映る離合詞という観点[9]を踏まえた中国語教育の第一歩として，日本語母語話者を調査協力者とする，一群の動詞が離合詞かどうかの判定調査を行った．本稿ではその結果を報告する．

もし，日本語母語話者が母語である日本語の知識を活かして離合詞かどうかの判定を相

当程度できれば，その日本語知識を活かした説明の仕方を工夫できるように思われる．また，判定結果から判定しにくい離合詞をリストアップし，それらを別に取り出して説明することで，離合詞の全体像の把握および使い方の習得に効果的な教授法を提案できると考えられる．

3. 母語の知識を活かした中国語教育

前節では離合詞に関する先行研究を概観し，日本語母語話者が持っている日本語の知識を活かした中国語教育を考えることが必要であることを述べた．これに関して，注2で挙げたように，中国語話者を対象とする日本語教育において，中国語話者が持っている母語の中国語に関する知識を活かした教育（母語の知識を活かした日本語教育）の重要性が指摘されている．本稿で考えるのは，その逆方向，すなわち，日本語母語話者が母語の日本語について持っている知識を活かした中国語教育の可能性である．

（4）で定義したように，離合詞は通常二字からなり，その語構成はVNであることが多い．逆に言えば，VNの語構成を持つ二字語は離合詞である確率が高い[10]．一方，中国語の二字語を見たとき，日本語の二字漢語を自然に参照すると考えられるが，このとき，日本語母語話者は「読書」はVN，「打倒」はVVのように，二字漢語の語構成を把握できる．この場合，「読書」を「書を読む」，「打倒」を「打ち倒す」とパラフレーズして語構成を把握する手法が採られている（野村1988，小林2004など）．

そうであるなら，この手法を使うことで，中国語の二字語が離合詞であるか否かを判断できる可能性が高い．次節では，この考えに即して行った調査結果について報告する．

4. 離合詞に関する調査

前節で述べたように，中国語でVNの語構成を持つ二字語は離合詞である可能性が高く，日本語母語話者は漢語の語構成を和語へのパラフレーズを用いて知ることができる．以上のことから，次のことが言える．

（7）
- a．日本語母語話者は，日本語の知識を用いて，中国語の二字語が離合詞であるかを予測することができる（正の転移[11]）
- b．ただし，中国語と日本語のずれなどのために，aの予測が当てはまらない場合もある（負の転移）
- c．中国語の二字語全体に占めるaの割合（カバー率[12]）が高ければ，正の転移を活かした中国語教育が可能になる

日中両言語の間には同形語が数多く存在する（文化庁1978）．こうした同形語をめぐっては多くの研究が発表されているが（陳毓敏2009，陳夢夏2019ほか），こうした同形語の存在が，日本語話者が中国語を学習する際のアドバンテージになることは間違いない．

本稿では，この観点を踏まえて，日本語母語話者が中国語の二字語の語構成をどのように分析するかに関する調査を行った．この判断で日本語母語話者が中国語の二字語のうち，VNの語構成を持つものを正しく識別できれば，日本語の知識を用いて，中国語の任意の二字語が離合詞であるか否かを適切に予測できることになる．

4.1 調査の概要

調査の概要は以下の通りである．

調査協力者は，日本語教育と日本語学を専攻する日本語母語話者1名である（中国語は未習）．上記のように，この調査で問題とするのは「日本語母語話者が日本語について持っている知識」なので，調査協力者が日本語専攻であることおよび中国語が未習であることは問題にならない．この点について，少し説明を加える．

まず，中国語が未習である点については，本調査では「日本語母語話者（調査協力者）が持つ日本語の知識」を問題にするので，調査協力者が中国語の知識を持っていない方が（中国語の知識の影響を受けない）「純粋な」データがとれるという点で望ましいと言える．

一方，調査協力者が日本語専攻であり，日本語をメタ的に分析することに長けている点については，次のように考える．本調査で考えるような日本語の二字漢語の語構成に関する情報は辞書に書かれていない．したがって，いわば，調査協力者を「辞書」と見なして「正解」を決める必要がある．本調査はパイロット調査であり，今後の本調査のためにも当該の中国語の二字語が日本語としてVNを判断できるか否かの「基準」を定める必要がある．そのためには，日本語をメタ的に扱うことに慣れている調査協力者に依頼する必要があると判断した．確かに，一般の日本語母語話者は日本語についてそうしたメタ的知識を持っておらず，その判断が一部今回の判断とずれる可能性があるが，それは，日本語の中での判断のゆれに属するものとして扱えばよいと考える(13)．

以上の点から，日中両言語の対応関係を調べ（その結果を活かした中国語教育の方法を考え）るという本稿の目的に関して，本調査の結果は一定以上の妥当性を有していると考える．

具体的な調査手法は次の通りである．まず，中国語検定3級，4級，準4級の対策問題集（柴2013，廖2013）に挙げられている語を「初級語彙」と見なし，その中の「動詞」に挙げられている二字語全291語(14)について，調査協力者である日本語母語話者1名に，日本語の知識に基づいて，それらが（4b）に当てはまる（すなわち，VNの構造を持つ）か否かをチェックしてもらった．

チェックの基準は，当該の二字語が日本語としてVNと解釈できるか否かである．解釈できるものには「○」，できないものには「×」をつけてもらった．また，漢字の字形の違いや当該の漢字が日本語で使われていないという理由で判断ができないものは「？」，VまたはNであるとの判定に迷うものには「△」としてもらった．次に，筆者がその判定結果を確認し，「○」「×」と離合詞としての適不適の一致率を求めた（判断のゆれが見られた場合には筆者が調査協力者と確認した）．

4.2　調査の結果

調査対象である全291語のうち，（4）の定義で離合詞と認められるのは73語である．調査対象である291語全てについて，調査協力者に日本語の母語知識に基づいて判断してもらった「○（離合詞である）」「×（離合詞ではない）」と，筆者が中国語母語話者としての基準に基づいて判断した「○」「×」の各組み合わせに属する語数は次の通りとなった．

ここで，左右の列の○，×の合計（73，218）はそれぞれ筆者が離合詞であると判断した／しなかった語数を表し，上下の行の○，×の合計（72，188）はそれぞれ調査協力者が離合詞であると判断した／しなかった語数を表す（注15，16も参照）．

表1　日本語母語話者の知識の有効性

		離合詞に関する筆者の判断		
		○	×	合計
調査協力者の判断	○（合計）	52	26	78
	（内数）	52（72.2%）	20（非 VN）（17.5%） 6（VN）(15)	72（100.0%） 6
	×	10（5.3%）	178（94.7%）	188（100.0%）
	小計	62	198	260(16)
	その他	11	20	31
	（内数）（△） （？）	7 4	8 12	15 16
	合計	73	218	291

＊調査協力者の判断のカバー率：(52＋178)/260×100＝88.5%(17), (18)

表1の「その他」に属するのは次のようなものである.

(8)　△の例：介绍，散步，见面，登记

　　？の例：帮忙，麻烦，洗澡，刮风

「その他」の部分は，日本語の二字漢語における「透明性」の問題が関わっていると考えられるが(19)，詳細については今後の課題としたい.

本節の目的である日本語母語話者の母語知識の有効性（カバー率）を考える際には「その他」の部分は除いて考える必要がある．そのようにしてカバー率を計算すると，上記のように88.5%となる．これは，日本語母語話者が持つ漢語に関する知識を使えば，（少なくとも初級の二字語においては）「離合詞」であるか否かを90%弱の確率で正しく予想できることを示している．これは，日本語母語話者に対する中国語教育において，日本語母語話者の母語知識を活用することの有効性を示していると言えよう.

5. 教授法上の提案

本節では，前節での調査結果と，現在日本国内で市販されている中国語教科書，中国語文法参考書などにおける離合詞の取り扱われ方の実態調査の結果を踏まえ，離合詞の教え方についての筆者の考えを述べる.

5.1　中国語教育における離合詞の取り扱いの現状について

現在，中国語教育では，離合詞は初級で教えるよりも中級文法として扱われていることが多いように思われる(20)．その教え方は，例を挙げながら離合詞の定義を説明し，次によく使われる離合詞の一覧表を挙げ，その一覧表にある離合詞の具体的な「離」（VとNが離れる場合）の使い方の例文を提示するのが一般的である（丸尾・李（2017），瀬戸口（2003）など）．なお，上野（2012）では離合詞の「離」の間に挟まれる文法要素について詳しく解説している.

5.2　離合詞の教え方に関する提案

5.1で挙げた方式が必ずしも悪いわけではないが，離合詞であるか否かを覚えるしかないのは学習者にとっては負担が大きい．その点も踏まえ，筆者も鄧（2012）の「「初級段階」で「離合詞」の基礎を教えたあと，中・上級段階ではその豊富な拡張形式を取り組みながら組織的に詳しく解説する」という説に賛成である．ただ，鄧（2012）はあくまでも

中国語文法の考え方に即して教えるという立場であるのに対し，筆者は初級段階から，日本語学習者が持つ日本語の二字漢語に関する知識を活かし，離合詞の判定が容易にできるようにし，その後，ずれた部分，日本人学習者にとって判定しにくい，理解しにくい離合詞をピックアップして，重点的に教えるべきだと考えている．実際，「はじめまして」に当たる「初次见面」の「见面」からして離合詞なのである．

ただし，一気に全てを教えるのではなく，重要なポイントを押さえて段階的に教えることが学習意欲の維持の面でも重要であると考える．本稿では，初級段階では離合詞について，離合詞か否かの判断と「離」の場合にＶとＮの間に挟まれる成分（量詞やアスペクト助詞など）と挟まれない成分（副次補語など）についての説明を行うのがよいと考える．

このうち，離合詞か否かの判断については，4 節で取り上げた離合詞のうち，90% 弱は日本語の知識を用いて特定できることがわかったので，この事実を積極的に用いるべきだと考える．

現在の中国語教育の文法教育は項目の立項の仕方や説明の仕方において，中国語学からの影響が大きい．しかし，中国語教育の観点からは学習者の視点に立った中国語教育文法を立てる必要がある（注 9 も参照）．

初級段階ではまず 80% 程度の正確さを目指すという方針で，ポイントを押さえる必要がある．離合詞で言えば，ＶをＮの間に挟む成分に言及しながら，挟んではいけない成分についても説明する．それも中国語文法における最も典型的な現象，「動詞 + 名詞」の間にアスペクト助詞や数量詞など入るという離合現象から説明した方が分かりやすいと言える．

また，様々な具体的な拡張を覚える必要がある．例えば，「见一面」，「洗个澡」という一回的な動作の場合の「数」や「量詞」の省略のされ方の違いや，「散散步」という重ね型の際の振る舞いまでを初級で教え，「生什么气呀（何を怒っているの）」のような感情を表す際の表現（これは離合詞独自の現象だけではなく，「整理什么书呀（何で本の整理なんかしているのよ）」のような動詞全般に通じる非難的なニューアンスを表す構文「動詞 + 什么 + 名詞 + 感嘆詞」）については，中国語全般の言語現象になっているので，疑問詞の応用を教える段階で離合詞の場合についても教える．その上で，「洗不了澡（お風呂に入れない）」「看不了书（本を読めない）」のような離合詞の可能用法も同様に，動詞の可能補語という文法項目との関連で教えるのがよいと考える．

6. おわりに

本稿では，日本語母語話者に対する中国語教育（日本語を活かした中国語教育）の方法論を考える一環として，離合詞の教え方を取り上げた．

まず，離合詞が「VN の内部構造を持つ二字語」であること，および，日本語と中国語には数多くの同形語が存在することを踏まえ，日本語母語話者に中国語の二字語が離合詞であるか，すなわち，VN の内部構造を持つと判断できるか否かを判定してもらい，その判断結果と離合詞であるか否かの筆者の判断を照らし合わせて，日本語母語話者の判断が離合詞であるか否かを予測する割合（カバー率）を計算したところ，90% 弱であった．

この結果を踏まえ，離合詞の教え方に関する試案を提示し，日本語母語話者にとって，離合詞は決して難しい文法項目ではなく，初級から日本語母語を活かしながら取り上げるべきであることを主張した．

今回の調査は調査協力者が 1 名のパイロット調査であり，今後は，調査協力者を増やし

たアンケート調査によって今回の考察結果を検証する必要がある．さらに，そうした知見を踏まえてよりよい教え方を探求する一方，副詞や補語など，他の文法項目も視野に入れて，考察を行いたい．

離合詞については，中国語学では未だに，詞か句かの議論が続いている．言い換えると，離合現象の延長線のようなもので，文法的に分析する必要があるのかという点が議論されているのだと思われる．一方，離合詞に似た文法現象である補語に関しては，いくつかのパターンについて，中国語学でも詳しく論じられている．中国語教育から見ればほぼ同レベルの難易度である教育項目「離合詞（VN)」と「補語（VV・VA)」が，中国語学における重要度によって，教える際に「あまり触れない（離合詞)」「詳しく教える（動詞補語)」というアンバランスな状態になっていると言える．

日本語教育において，母語話者の言語感覚を記述した日本語学とは異なり，日本語学習者の視点に立った日本語教育文法が構築されつつあるのと同様，中国語学とは異なる，中国語学習者の視点に立った中国語教育文法の構築が求められると筆者は考える．そして，その構築のために，これからも研究と教育実践を続けていきたいと考えている．

参考文献

庵功雄（2015)「中国語話者の母語の知識は日本語学習者にどの程度役立つか――「的」を例に」『汉日语言对比研究论丛』7，汉日对比语言学研究会

小林英樹（2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房

柴森（2013)『絶対合格！　中国語検定３級頻出問題集』高橋書店

白川博之（2002)「外国人のための実用日本語文法」『月刊言語』31-4，大修館書店

張立波・夏逸慧・謝韜（2021)「離合詞レキシコンの開発について」中国語教育学会第 19 回全国大会予稿集

張麟声（2011)『新編中国語話者のための日本語教育研究入門』日中言語文化出版社

陳毓敏（2009a)「中国語母語学習者の日本語の漢字語習得研究のための新たな枠組みの提案」『日本語科学』25，国立国語研究所

陳夢夏（2019)「二字漢字語における日中対照分析の枠組みの提案」『一橋日本語教育研究』7，一橋大学

鄧凌志（2012)「中国語「離合詞」の教授法に関する研究」『Polyglossia: the Asia-Pacific's voice in language and language teaching』23，立命館アジア太平洋大学

野村雅昭（1988)「特集・複合語―二字漢語の構造」『日本語学』7-5，明治書院

文化庁（1978)『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局

本多由美子（2017)「二字漢語における語の透明性―コーパスを用いた語と構成漢字の分析―」『計量国語学』31-1，計量国語学会

守屋宏則（2013)『やさしい中国語文法の基礎』東方書店

李泓瑋（2021)「「母語の知識を活かした日本語教育」のための方法論：中国語を母語とする日本語学習者のために」『一橋日本語教育研究』9，一橋大学

冯战兵（2009)「对外汉语教学中的 VO 式“离合词”」『梅光学院大学論集』42

廖八鳴（2013)『絶対合格！　中国語検定４級・準４級頻出問題集』高橋書店

陈望道（1940)《语文运动的回顾和展望》

宮本幸子（2000)「日本学生学习汉语常见的表达错误」『汉语学习』4

韩越（1999)「论日本学生的母语负迁移及其对策」『湖南大学学报：社会科学版』13（4）

吕叔湘（1984)《汉语语法分析问题》商务印书馆

张寿康（1957)「略论汉语构词法」《中国语文》

付録

調査した教科書，文法参考書

〈初級教科書：全て離合詞に関する記述なし〉

1．塚本慶一監修，劉穎著（2014)『(最新版）1 年生のコミュニケーション』白水社（2020 第 16

刷）／2. 竹島金吾監修，尹景春・竹島毅著（2012）『中国語　はじめの一歩』白水社（2020 第 25 刷）／3. 竹島金吾監修，尹景春・竹島毅著（2012）『中国語　つぎへの一歩』（2020 第 27 刷）／4. 劉穎・喜多山幸子・松田かの子著（2008）『1 冊めの中国語（講読クラス）』白水社（2020 年第 34 刷）／5. 劉穎・柴森・小澤正人著（2012）『2 冊めの中国語（講読クラス）』白水社（2019 年第 18 刷）／6. 本間史・孟広学著（2007）『中国語ポイント 55』白水社（2019 第 29 刷）／7. 竹島毅・趙昕著（2015）『さあ，中国語を学ぼう――会話・講読――』白水社（2019 第 11 刷）／8. 吉田泰謙・相原里美・葛婧（2017）『知っておきたい中国事情（改訂版）』白水社（2020 第 7 刷）／9. 郭海燕・周一川著（2012）『楽しくはじめる中国語（改訂新版）』松柏社（2015 年第 3 刷）（筆者が他機関で使用中の教科書）

〈コラムで離合詞のことが書かれている初級教科書〉

10. 殷文怡（2017）『改訂版　大学 1・2 年生のためのすぐわかる中国語』東京図書（2020 年第 1 刷）（筆者が本学で使用中の教科書）

〈離合詞についての記述のある中級以上対象の文法解説書〉

11. 上野惠司（2012）『中国語基本文法のツボ』（原作：《简明汉语语法学习手册》（2002）北京大学出版社）アスク
12. 瀬戸口律子（2015）『完全マスター中国語文法　改訂版』語研
13. 三宅登之（2012）『中級中国語　読み解く文法』白水社
14. 丸尾誠・李軼倫（2017）『中国語解体新書』駿河台出版社

註

（1）間接法とは学習者の母語で目標言語を教えるもので，本稿で対象とする日本国内における日本語母語話者に対する中国語教育はその例である．

（2）その例として，中国語話者に対する日本語教育における「母語の知識を生かした日本語教育」がある（庵 2015，李 2021 などを参照）．

（3）「離合詞」は（基本的には）動詞の一分類なので，瀬戸口（2015）のように「離合動詞」と呼ぶのが妥当と思われるが，中国語教育での通例に沿って本稿でも「離合詞」と称することにする．

（4）「*」はその文が非文法的（ungrammatical）であることを示す．

（5）「?」はその文の文法的適格性がやや落ちること，「??」はそれがかなり落ちることをそれぞれ表す．

（6）離合現象にはこれ以外にも，次のようなものもある．

（ア）a．重ね型の時に動詞成分だけを繰り返す

Ex. 学习（学ぶ）：我学学习．（私は少し中国語を勉強する．）

b．反復疑問文の際に動詞成分だけを繰り返す

Ex. 打工（アルバイトする）：今天你打不打工？（今日はアルバイトがあるの？）

なお，動詞の副次成分（「いつ」「どこで」「誰と」など）は V と N の間に挟まれない．これは中国語の動詞一般の離合現象と同じ語順である．

（イ）a．我　昨天　和　太郎　吃　　了　晚饭.
私　昨日　と　太郎　食べる　た　夕食
（私は昨日太郎と夕食を食べた．）

b．我　昨天　在　学校　唱　　了　一首　歌.
私　昨日　で　学校　歌う　た　1 曲　歌
（私は昨日学校で歌を歌った．）

（7）なお，量詞とアスペクト助詞とでは文法的振る舞いがやや異なる．すなわち，前者では離合が義務的であるのに対し，後者では（少なくとも統語的には）離合は随意的である．

（ウ）a．*我唱歌半小时．（離合なし）OK 我唱半小时歌．（離合あり）

b．OK 我唱了歌．　（離合あり）OK 我唱歌了．　（離合なし）

なお，両者がともに現れる場合は（1a）（1b）に見るように，離合が義務的になる．

（8）その文が文法的に適格であることを明記する必要がある場合，文頭に「OK」と記す．

（9）白川（2002）は，日本語母語話者が考える日本語を「日本語」，非日本語母語話者が考える日本語を「ニホン語」として区別し，日本語教育文法においてまず考察対象とすべきは後者であることを指摘している（庵 2017 も参照）．本稿で指摘したいのは，この逆向き，すなわち，日本語母語話者（非中国語母語話者）の目に映る中国語を捉えることが中国語教

育文法を考える上で重要であるということである.

(10) 表1にある73語の離合詞のうち，VNであるものは68語（離合詞のうちVNであるものは93.2%）であった.

(11) 母語の転移（transfer）のうち，母語の知識の転移が目標言語での正用につながるものを正の転移（positive transfer），母語の転移が逸脱につながるものを負の転移（negative transfer）と言う.「母語の知識を活かした外国語教育」では，正の転移を最大限活かしつつ，負の転移が起こる場所を対照研究で予測してそれを防ぐことが求められる（Cf. 張 2011）.

(12) カバー率は「(7aに当てはまる語数)／(7aに当てはまる語数+7bに当てはまる語数)×100」で求められる.

(13) 一般に，母語話者の内省を問う調査では個人間の判断のズレが見られるが，プロトタイプ理論などから考えても，そうしたズレは典型的なところでは起こりにくく，周辺的なところで起こりやすいと言える．そうした意味からも，今回，日本語をメタ的に分析することに長けた調査協力者によって，「基準」を定めることには意義があると言える.

(14)「应该，愿意」のような助動詞は二字語だが考察対象から外した.

(15)「客气，出口，进口，关心，同意，注意」はVNの語構成を持つが，離合詞とは言えない．なお，これは中国語内部の問題なので，カバー率の算出の際にはこの6語を母数から除いた.

(16) この場合の各列の小計は「○」の内数と「×」の個数の合計である.

(17) 表1のゴシックの部分がそれぞれ分子と分母となる.

(18) ここで，筆者と調査協力者の間で「ずれ」が生じたのは，以下の30語である.

調査協力者は離合詞，筆者は非離合詞と判定したもの（20語）

休息，知道，保证，报道，管理，回想，建议，梦想，失望，修理，
整理，告辞，加工，翻译，保护，联络，原谅，联系，结束，恢复

調査協力者は非離合詞，筆者は離合詞と判定したもの（10語）

睡觉，学习，复习，游泳，报告，考试，打架，吵架，道歉，干活

(19) 二字漢語の透明性について詳しくは本多（2017）を参照されたい.

(20) 付録に挙げた初級教科書1～9には全て離合詞関係の記載はなかった．離合詞に関する問題は，作文の誤用分析でよく指摘されていることから，中級から始まる作文の授業で誤用例に基づく離合詞の説明が行われることが多いと考えられる．ただし，作文用の市販の教科書が少なく，内容は教師に任されるのが現状であり，今回の調査でも，中級以上で離合詞について扱っているのは付録の11～14の文法参考書のみであった.

Abstract

A Study on How to Teach Chinese Separable Verbs to Japanese Learners of Chinese

Liu Shizhen

As a methodology for teaching Chinese to native speakers of Japanese, there is an idea of using the knowledge of the Japanese language that native speakers of Japanese have to teach Chinese grammar. In this paper, I report the results of a pilot study on separable verbs from the standpoint of this methodology.

First, I roughly defined separable verbs as two-letter words with VN word structure, and then I investigated to what extent Japanese native speakers' knowledge on the internal structure of two-letter Chinese-origin verbs in Japanese can be used to predict whether a two-letter Chinese verb is a separable verb or not.

Next, I asked a native Japanese speaker who had not yet learned Chinese and is majoring in Japanese linguistics and Japanese language teaching to judge whether 291 two-letter words at the elementary level（up to the third level of the Chinese Language Proficiency Test）were separable verbs or not according to the above definition, based on his knowledge of Japanese, and examined the degree of agreement between his judgment and mine. As a result, the degree of agreement（coverage rate）was about 90%, indicating that it is possible to judge whether a word is a separable verb or not based on knowledge of the native Japanese language.

Based on the above results, I proposed a new teaching method for teaching separable verbs, such as introducing separable verbs from the beginner level using learners' knowledge of Japanese, or their mother tongue.

人文・自然研究　第 16 号